

自由応募論文

## 普遍者の多重位置と相対化

秋葉剛史

### Abstract

The strong immanent realism (i.e., the view that there exist universals as entities capable of being wholly present wherever their instances are located) has been traditionally criticized for having certain absurd consequences. Although Gilmore (2003) replied to these criticisms by taking spatial relations involving universals as relativized to their locations, his reply has been rebutted by Keskinen et al. (2015). This paper aims to defend the strong immanent realism by proposing a new version of the relativization strategy, according to which a spatial relation is to be relativized just to the extent that it contains universals or concrete particulars among its terms. This version, it will be argued, can satisfactorily address the objections hitherto posed to the strong immanent realism.

ここにある二個のカップはまったく同じ色をもっており、その金塊とあの辞書はまったく同じ重さをもっている。普遍者に関する実在論によると、数的に異なる個物の間のこうした質的同一性は、問題となる個物がある同一の普遍的性質を共有することによって成り立つ。さらに普遍者実在論の中でも、「内属的実在論 Immanent Realism」と呼ばれる立場のあるバージョンによると、普遍者はそれを例化する個物と同様、文字どおりこの時空世界の中に存在する (Armstrong 1978, 1988; Hawthorne & Cover 1998; Paul 2006)。たとえば、このカップが例化している《白さ》は、まさにこのカップのあるこの場所に——カップの一部として、あるいは少なくともそれと重なり合っ——存在している。

だがこのような主張に対しては、古くから多くの異論が (普遍者実在論の

内部からも外部からも)提起されてきた。普遍者は通常、異なる事物において厳密に同一な存在者として理解されている。よって前述した内属的実在論の主張が正しいとすれば、ある同一の存在者がまるごと全体として異なる場所に同時に存在すること、すなわち「多重位置 multi-location」をもつことが可能でなければならない。だがこのような事態は、すでにプラトンの対話篇で「何よりも不可能なこと」(『ピレボス』15b)と示唆されているし、現代の形而上学者の中にも、このような事態が成り立つという想定はただちに不条理な帰結をもたらすと考える者は少なくない (Campbell 1990; Ehring 2002; Heil 2012; Lowe 1998, 2006; Moreland 2001; Quinton 1958)。

本稿の目的は、この「多重位置」の問題が、前述の内属的実在論にとって実際にどの程度深刻な問題になるのかを検討することだ。結論を先取りして言う、筆者のみるところこの問題は、類似の状況への対応策としておなじみの「相対化戦略」をある仕方で開催することで十分に応答可能である。相対化戦略によって普遍者の多重位置問題に応答する試みは、すでにC・ギルモアによりなされている (Gilmore 2003)。しかしギルモアの応答は、近年A・ケスキネンらによって批判されており (Keskinen et al. 2015)、以下でわれわれもみるように、それを維持できる見込みはたしかに明るくない。こうした認識の下、本稿では、ギルモアとその批判者たちがともに見過ごしてきた (しかし実は自然な) 相対化戦略のあるバージョンを提示することで、この応答方針が依然として有効であることを示したい<sup>1</sup>。

本稿の議論は次のように進む。第1節では、以下で検討する内属的実在論の主張と動機を改めて明確にする。第2節では、この立場は明らかな不条理へと導くという趣旨の批判を導入し、第3節で、その批判に対しギルモアが与えた相対化による応答を確認する。第4節では、ギルモアの応答の問題点をケスキネンらの批判をもとに明らかにし、第5節では、相対化戦略の改良案を提示する。最後に第6節では、その改良案に対する疑問に応答する。(何度か攻守交代があってややこしいが、基本的に(第6節を除けば)、奇数節が内属的実在論の支持者側からの議論、偶数節がその反対者側からの議論である。)

## 1. 強い内属的実在論——主張と動機

まずは以下で検討すべき立場の主張と動機を確認しよう。前述のように、本稿で検討したいのは「内属的実在論」と呼ばれる立場の一種である。内属的実在論は、広義には、普遍者の存在を承認したうえで、普遍者はその個別例が存在する場合に限って存在するという「例化の原理」を受け入れる立場

として理解される (Armstrong 1978: 113, 1989: 75; Lowe 1998: 159, 2006: 99)<sup>2</sup>.  
そして本稿が主題とする内属的实在論のバージョンは、この例化の原理に加え、以下の二つの主張を受け入れる立場として特徴づけられる。

一つ目は、普遍者は文字どおりこの時空的世界の中に存在するという主張だ。広義の内属的实在論の支持者の中には、普遍者は——例化の原理により時空的世界と密接に結びつけられているものの——それ自体としては一切時空位置をもたない「抽象的」存在者だと考える者もいる (Grossmann 1983; Lowe 1998, 2006). これに対し本稿で検討する立場は、普遍者を「具体的」存在者の一種として捉える。すなわちこの立場によると、普遍者は、個物や出来事といった存在者と同様、文字どおりこの時空世界の中に特定の位置をもち、他のものと種々の時空的関係に立つような存在者である。

普遍者の「具体者説」と呼ぶこの立場は、一定の理解可能な動機をもっている。たとえばこの立場は、普遍者が存在するという信念を、この時空的宇宙こそが实在のすべてだという一見もっともな見方 (時空主義) と折り合わせるために必要だろう (Armstrong 1978: 126f, 1988). またこの立場は、因果とは時空世界内の何かと何か——典型的には出来事や状態——の間の関係であり、その関係の項はまさに性質を構成要素として含むという考察によっても動機づけられるようにみえる (Armstrong 1978: 75, 1997: 204ff; Edwards 2014: 33ff). さらに具体者説は、われわれが世界に対し認識的アクセスをもっているという事実からも支持されるようにみえる。というのも、そうしたアクセスが成り立つためには、そこで把握される——また特に知覚の場面ではわれわれが「面識」をもつ——当のものとしての性質が、われわれと相互作用可能なものとして時空世界内に存在していなければならないように思われるからだ (Armstrong 1997: 95f; Peacock 2016: 45f; Forrest 2017)<sup>3</sup>.

ただし普遍者が時空位置をもつと考える場合も、その「もち方」をどう考えるかについては選択の余地があり、上で示唆した主張の二つ目はその点に関わる。具体者説の中で可能だと思われる一つの見方は、普遍者はその個別例が現れているすべての場所に、諸々の部分をもつことで存在するというものだ (Ehring 2002: 21). この見方をとる場合、ある普遍者が全体としてもつ位置は、その個別例が位置する (多くの場合散らばった) 諸領域をあわせてできる単一の領域ということになる (散在説)<sup>4</sup>. これに対し本稿が検討する立場は、既述のように、ある普遍者の個別例が存在する各々の場所には、その普遍者の (一部でなく) 全部が余すところなく現れている wholly present と主張する。この立場に従えば、普遍者はその全体がもつ位置が一つでなく複数でありうるという意味で、多重位置をもちうる存在者なのである (Armstrong

1978: 75f, 1988: 110).

この「多重位置説」をとる理由としては、何人かの論者が同様の論点を挙げています。すなわちそれは、もう一つの「散在説」をとる場合、普遍者は「異なる個別例を貫いて厳密に同一なもの」という通常理解を維持できなくなるように思われることだ(『パルメニデス』131b-e; Armstrong 1978: 108; Ehring 2002: 21. Cf. MacBride 1998: 207; 前田 2007: 49)。類比のため、ある等質な粘土をちぎってあちこちに置いたとしよう。散在説の下では、ある普遍者が異なる場所に存在する仕方は、こうした粘土片があちこちに散らばって存在する仕方と本質的に変わらない。だがそうすると、ちょうどあちこちにある粘土片があくまで互いに別個の存在者であるように、異なる場所に存在する普遍者(その諸部分)もまた、互いに別個の存在者でなければならなくなる。つまり、普遍者はもはや「異なる個別例を貫く同一物」ではなくなってしまう、逆にこの理解に忠実であろうとすれば、多重位置説をとるほかはないように思われるわけである。

まとめると、本稿で検討するのは、普遍者の具体性と多重位置をとともに認める内属的実在論の立場である。以下ではE・J・ロウの用語法(Lowe 2006: 98f)に従い、この立場を「強い内属的実在論 Strong Immanent Realism」、略して「SIR」と呼ぶことにしよう。

## 2. 帰謬法による批判

前節でみたように、このSIRには一定の理解可能な動機がある。しかしすでに導入部で述べたように、この立場に対してはかねてよりかなり強い形の批判がなされてきた。すなわち、SIRからはいくつかの真でありえないような帰結が導かれるという「帰謬法」的批判である<sup>5</sup>。本節ではこれらの批判の内容を確認しよう。

まず最もシンプルなのが、SIRの下では、一つの普遍者が相互に矛盾した特徴をもつことになってしまうという批判である(『ピレボス』15b; Campbell 1990: 12; Magalhães 2006: 304; Moreland 2001: 89)。たとえば次のような議論が、この種の批判の典型だ(Ehring 2002: 21)。ある普遍者Uが、現時点で太郎と花子により例化されているとしよう。また、太郎はこの机から5m離れており、花子は同じ机から5m離れていない(たとえば1mの場所にいる)としよう。この場合、問題の普遍者Uは、机から5m離れていると同時に、5m離れていないことになる。なぜなら、《太郎がもつU》は机から5m離れており、《花子がもつU》は机から5m離れていないが、《太郎がもつU》＝《花子がもつU》＝Uだからである。しかしいかなるものも、こうした矛盾し

た特徴を同時にもつことはできない<sup>6</sup>。

また二つ目に、ロウは、SIRからは個物に関する<sup>7</sup>についても受け入れがたい帰結が生じると論じている。彼の議論は次のようなものだ (Lowe 1998: 156; 2006, 24)。SIRによると、ある普遍者の個別例が位置するそれぞれの場所には、その普遍者と個別例の両方が全体として存在する。それゆえ、ある普遍者Vがある時点で、アテネにある個物aとベルリンにある個物bの双方によって例化されている場合、普遍者Vは、全体としてaと同じ場所にあると同時に、全体としてbと同じ場所にある。だがこれはおかしい。なぜなら、いま述べた《～は全体として…と同じ場所にある being wholly in the same place as》という関係は明らかに同値関係だからである。いまこの関係を「R」と表すとすれば、上で仮定された「R (V, a)」および「R (V, b)」という二つの言明からは、Rの同値関係性（その対称性と推移性）より、「R (a, b)」という結論が導かれる。しかしこの結論は、別の場所（アテネとベルリン）にある個物aとbがまったく同じ場所にあるということの意味しており、仮定に反している。

### 3. ギルモアの「2n提案」

このようにSIRは、いくつかの不条理な帰結をもつ立場として批判されてきた。しかしここで一部の読者は、こうした批判に対しては、同様の場面でおなじみの「相対化戦略」によって単純に応じられるのではないかと思っただかもしれない<sup>7</sup>。一般に、一見相互に矛盾した二つの言明をともに真なものとして認める動機や必要性がある場合、それらの言明は（実は）ある参照項と相対的にのみ真理値をもつのだと主張することでその矛盾の見かけを解消する試みはしばしば行われる。だとすれば、SIRに対する上の批判にも同様の仕方で応じられるのではないだろうか。

実際この方針は、ギルモアにより追求されている (Gilmore 2003)。ただし彼の意図を理解するには、この文脈でまず思いつかれそうな一つの相対化による応答を先にみておくのがよい。その応答とは、いわゆる変化の問題に対する三次元主義者の応答 (cf. Lewis 1986: 204) に範をとった次のようなものだ (Ehring 2002: 21)。三次元主義によると、たとえば同一の対象としてのこのペンは、「机から5m離れている」と「机から5m離れていない」という相容れない特徴をもつことができるが、ここに憂慮すべき問題はない。なぜならこの矛盾の見かけは、単に関連する時点への言及を省略したことで生じたものにすぎず、その省略を補えば、実際にこのペンがもつのは「時点*t*において机から5m離れている」と「時点*t'*において机から5m離れていない」と

いう何ら矛盾のない特徴だと言えるからである。これと同様に考えれば、SIRから導かれる一見したところの矛盾も、隠れた相対化要素を明示化することで解消できる。ただしこの場合に問題となる相対化は、(時点に加え)位置に対するものだ。たとえば前節の例に即して言えば、太郎と花子によって例化される普遍者Uは、あくまでこの二人の位置と相対的に、「机から5m離れている」と「机から5m離れていない」という特徴をもつと考えることができる。つまり太郎と花子のある時点での位置を $L$ と $L'$ とすれば、その時点でUが実際にもつのは、「 $L$ において机から5m離れている」と「 $L'$ において机から5m離れていない」という何ら矛盾のない特徴だと言えるわけである。

これは一見もっともな応答だが、これがうまく機能しない例をD・エーリングが挙げている (Ehring 2002: 21f)。二つの普遍者VとWが、ある時点で、北極点と南極点の両方でともに例化されているとしよう。この場合、北極点のVは南極点のWより北にあり、南極点のVは北極点のWより北にない。北極点のV = 南極点のV = Vであり、北極点のW = 南極点のW = Wだから、一方の普遍者Vについて、「Wより北にある」と「Wより北にない」の二つがともに成り立つように見える (Wに関して同様)。そしてこの矛盾の見かけは、前段落で述べられたやり方では解消できない。なぜならそのためには、i) 「Vは $L_1$ においてWより北にある」を真にするような位置 $L_1$ と、ii) 「Vは $L_2$ においてWより北にない」を真にするような別の位置 $L_2$ を特定する必要があるが、そのような $L_1$ と $L_2$ はありそうにないからである。たとえば $L_1$ の候補としては、北極点、南極点、北極点と南極点の総和、といったものが考えられるが、そのいずれをとってもi) は真にならない<sup>8</sup>。要するに、問題となるのが普遍者と個物の間の空間的關係ではなく普遍者同士の間空間的關係である場合、前段落でみた応答が機能しないケースが出てくるわけである。

さて前置きが長くなったが、このようなケースも考慮に入れてSIRを救おうとするのが、ギルモアが「2n提案 (2n proposal)」と呼ぶ応答だ。その応答は、普遍者を項として含む空間的關係について次のことが成り立つという主張にもとづく (Gilmore 2003: 422)：

[2n分析] 通常n項関係として記述される空間的關係は、実はさらにn個の空間位置を相対化項として含む2n項関係である。

提案の趣旨を説明するため、「5m離れている」という表現を例にとろう。この表現は通常、「～は…から5m離れている」という二項関係を表すものと

考えられているだろう。しかしギルモアの2n提案によると、少なくとも関係項のうちに普遍者が含まれる場合、この表現に実際に対応するのは、《～は○において△における…から5m離れている》という四項関係——「○」と「△」には空間位置を指す表現が入る——である。

たしかにこの提案を採用すれば、直前でみたエーリングの事例にはうまく対処できる。2n提案に従えば、普遍者Vが「Wより北にある」と「Wより北にない」という記述をともに満たすことは、ごく単純に、「Vは北極点において、南極点におけるWより北にある」および「Vは南極点において、北極点におけるWより北にない」という、相互に矛盾しない二つの言明が真であることとして解釈できるからである。そしてこの解釈は、問題の関係の項が普遍者と個物になった場合（先の太郎と花子のような例）でも同様に片行える。

さらに2n提案は、前節でみたロウの批判に対しても機能する。先ほどと同様、普遍者Uを例化する（アテネとベルリンにある）二つの個物aとbを考え、それぞれの位置を $L_a$ および $L_b$ としよう。2n提案によると、この場合に成り立つのは、普遍者と個物の間の単純な二項関係「 $R(V, a)$ 」と「 $R(V, b)$ 」ではなく、それぞれの位置を追加項として含む四項関係、すなわち「 $R^*(V, L_a, a, L_a)$ 」と「 $R^*(V, L_b, b, L_b)$ 」である（ $R^*$ は問題の四項関係を表す）<sup>9</sup>。明らかに、これら二つの仮定からは「 $R^*(a, L_a, b, L_b)$ 」という不都合な結論は出てこない。なぜなら、一つ目の仮定から対称律により「 $R^*(a, L_a, V, L_a)$ 」が導かれても、これと二つ目の仮定に対し推移律を適用することはできない——媒介する共通項がない——からである。つまり2n提案の下では、別の位置にあると仮定された二つの個物が同じ位置にあることになってしまうという困難は生じない。

こうしてギルモアの2n提案は、従来の帰謬法批判からSIRを擁護することに一見成功しているようにみえる。実際ギルモアの応答は、一部の論者によって説得的なものとして評価されているし（Peacock 2016: 63f）、前述のエーリングも、この応答を受け後の著作では意見を変えているようにみえる（Ehring 2011: 29f）<sup>10</sup>。

#### 4. ギルモアの応答の批判的検討

だが実際のところ、以上のギルモアの応答がSIRの有効な擁護たりえているかどうかについては疑問の余地がある。本節では、ギルモアの応答に対して近年ケスキネンらが行っている批判（Keskinen et al. 2015）を主な手がかりに、このことを確認しよう。

ケスキネンらの批判の出発点となるのは、2n提案は普遍者の時空的内在を単に派生的で名ばかりのものにしてしまうのではないかという懸念だ (Keskinen et al. 2015: 62-4. Cf. Ehring 2002: 18 n.2). 2n提案によると、普遍者はその空間的特徴を全面的に位置に負っている。つまり普遍者は、ただ自身が例化される諸々の位置との関係を通じてのみ、何かと「5m離れた」ものや、何か「より北にある」もの等々として記述されうる。だがこのように言うことは、実質的に、普遍者をもつとされる空間的特徴は単に位置のそれから派生した名目的なものにすぎず、文字どおり普遍者に帰属するわけではない、と言うことに等しいのではないだろうか。例として、「UはLにおいて、L'におけるVと5m離れている」という言明が真だとしよう。2n提案によれば、普遍者に関する空間的言明はすべてこの種の相対化を含むものになるが、この言明の真理は次の事実に存するものとして分析するのが自然である：

- (\*) 普遍者UとVはそれぞれ位置LとL'において例化されており、かつ、LとL'は互いに5m離れている

この分析において、文字どおり空間的關係に立つ (i.e., 5m離れている) とされるのは位置LとL'のみであり、普遍者UとVは、ただ例化関係により位置と関係づけられている——これは普遍者を抽象的存在者とする説 (第1節) でも認められることであり普遍者の空間的内在を意味しない——だけである点に注意しよう。つまり(\*)では、普遍者それ自身は空間的關係の項として扱われていない。だが、普遍者を含んだ空間的言明が常にこのように分析されるとすれば、2n提案は当初の目的であったSIRの擁護には失敗していることになる。なぜなら第1節でみたように、SIRは(普遍者を抽象者とする説と違って)、普遍者を時空世界内に存在する具体者として、それゆえ、他の存在者と文字どおり空間的關係に立つものとして捉える立場だったからである。たとえ2n提案が矛盾の見かけを解消できるとしても、それによってSIRの中心主張の一部が破棄されることになるなら、それはSIRの擁護としては失格だろう。

もっともギルモア自身も、このような批判——以下「名目性批判」と呼ぼう——は予想しており、応答を試みている (Gilmore 2003: 425f)。そのためにギルモアはまず、2n提案を二つのバージョンに区別する。一つ目は「制限バージョン restricted version」と彼が呼ぶものであり、それによると、上でみた [2n分析] という主張は関係項のうちに普遍者が含まれるときに限つ



て成り立つ。つまり、通常 $n$ 項関係として扱われる空間的關係は、普遍者以外のものを項とする場合には、通常考えられているとおりの $n$ 項関係である。またもう一つは「無制限バージョン *unrestricted version*」と呼ばれるものであり、それによると、[ $2n$ 分析]は空間的關係の項が普遍者であろうと個物であろうと、また空間位置そのものでであろうと、端的にすべてのケースで成り立つ。

この区別のうえで、ギルモアは、 $2n$ 提案はこの二つのバージョンのどちらの下でも先の名目性批判に応じられると主張する。彼によれば、このことはまず「無制限バージョン」に関して明白である (Gilmore 2003: 426)。このバージョンによると、通常 $n$ 項関係とみなされる空間的關係は、実際のところ常に $2n$ 項関係である。それゆえ特に、問題となるのが位置そのものの間の空間的關係である場合も、その本来の形は、「 $L$ は $L$ において、 $L'$ における $L'$ と $5m$ 離れている」といった位置自身への相対化を含む $2n$ 項関係である。したがって、普遍者を含む空間的關係が位置への相対化を含むとしても、そのことは当の関係を「単に名目的」なものとして格下げすることはない。この場合普遍者は、位置とまったく同じ基本的な仕方でも空間的關係に立つことになるからである。一方で「制限バージョン」の場合、もう少し話が複雑になる (Ibid.)。なぜならこのバージョンの下では、位置は直接それ自身で空間的關係に立つことになるため、それらと相対的にのみ成り立つ普遍者の空間的關係は単に名目的なものだという見方はたしかに一見自然だからである。しかしギルモアによると、この見方は少なくともSIRの支持者に強いられてはいない。すなわちSIRの支持者は、位置のように直接的(非相対的)に空間的關係に立つことと、普遍者のように何かと相対的に空間的關係に立つことは、何かが空間的關係に立つ際の二つの「等しく基礎的 *equally fundamental*」(Ibid.)な仕方だと主張する「自由」をもっている (Ibid.)。そしてこの自由を行使しさえすれば、先述の名目性批判には応えることができる。

しかしケスキネンらによると、以上のようなギルモアの応答はある明白な難点を抱えている (Keskinen et al. 2015: 64-9)。その難点とはひとこと言えば、いまみた二つのバージョンによる応答はどちらも、相応の積極的な理由なしには行えないはずの非標準的(改訂的)な主張を、まさにそうした理由なしに行っていることだ。

まず「制限バージョン」に関して言うと、問題となるのは、 $n$ 項関係と $2n$ 項関係が空間的關係の「等しく基礎的」な二つの種類だという主張である。制限バージョンによる名目性批判への応答はこの主張に依拠していたが、ケスキネンらによるとこの主張にはまったく正当性がない (Keskinen et al.

2015: 66f). 上でみたように、もし [2n 分析] が普遍者には当てはまるが位置には当てはまらないと (このバージョンに従って) 考えるなら、基礎的な意味で空間的關係に立つのはあくまで位置であり、普遍者に帰される空間的關係はせいぜいそこから派生したもの——上の (\*) のような仕方では分析されるべきもの——と考えるのが自然である。(この点は、ケスキネンらが論じていることではないが、たとえば命題を真理値の直接的な担い手と考える場合、信念や発話等に帰属させられる真理値は命題のそれに対し派生的なものと考えてるのが自然であると同様だ。) つまりこの場合の「デフォルト」は、位置の間の空間的關係と普遍者の間のそれ (n 項関係と 2n 項関係) は、等しく基礎的なのではないという見方であり、これに反する「等基礎性」の主張を正当に行うには、相応の積極的な、そして目下の論点と独立な理由が必要である。しかしギルモアは、この等基礎性を主張することは SIR の支持者の「自由」だと述べるばかりで、そうした理由をまったく与えていない。つまり彼のいう制限バージョンは、自身に課せられた挙証責任を果たすことなく、単に自分の言いたいことを言うだけの立場にとどまっている。

基本的な事情は「無制限バージョン」についても同様だ。すでにみたように、[2n 分析] が全面的に成り立つとする無制限バージョンは、位置そのものの間の空間的關係も位置への相対化を含んでいると主張する。しかし再び、ケスキネンらによればこの主張には正当性がない (ibid: 67-9)。たしかに彼らの言うように、位置の間の空間的關係が当の位置と相対的にのみ成り立つという見方は標準的なものではないだろう (おそらくどの分野のテキストを見てもそういう説明にお目にかかることはない)。つまりわれわれの通常の見方は、位置の間の n 項関係は見かけのとおり n 項関係だというものであり、それと反する無制限バージョンの主張は「改訂的」なものである。よってこの主張は、相応の独立的で積極的な理由を必要とするが、前述のようにギルモアはそうした理由を一切与えていない。それゆえ、無制限バージョンによる名目性批判への応答もやはり正当性を欠いている (ibid: 65)。

以上が、ギルモアの応答に対してケスキネンらが行う批判の概要である。この批判はどの程度の説得力をもつだろうか。筆者のみるところ、ケスキネンらの批判はたしかに重要な論点をついているが、その論点をもつ効果は彼らが主張するよりは間接的である。上の批判に対しては、2n 提案の側からさしあたり次のような応答ができるからだ<sup>11</sup>。たしかにギルモア自身は、上で要求されたような積極的理由を示していないから、上述された批判は彼に対する対人論法としては妥当だろう。しかし、ギルモアに代わって 2n 提案を弁護することは依然不可能ではない。第 1 節でみたように、2n 提案が救お

うとしている SIR はもともと、いくつかのもっともらしい見方——時空主義、因果性、認識的アクセス、厳密な同一者としての普遍者、に関わる見方——を真なるものとして確保できる立場として動機づけられていた。このことを思い出せば、2n 提案の二つのバージョンが行う改訂的主張に対しても一定の正当性を認めることができるはずだ。なぜなら一般に、ある立場が十分な動機をもったものである場合、その立場を維持するために必要な措置として、われわれの通常の見方の一部に修正を求めることは正当だからである。

この最後の方法論的原則はもっともらしく、これに訴えた 2n 提案の擁護は少なくとも方針としては認めてよいと思われる。しかし、この方針にもとづく 2n 提案の擁護論が実際に有効なものになりうるかどうかとなると、雲行きはかなり怪しくなる。特に問題となるのは、ここで SIR の支持動機としてもち出された見方の大半は、SIR 以外の立場でも確保できるという点だ<sup>12</sup>。たとえば、トロープ唯名論や（第 1 節でみた）散在説といった立場は、時空主義や因果性や認識的アクセスに関わる前述の見方を問題なく確保できる（Campbell 1981; Effingham 2015: 851. Cf. Lowe 2006: 15）。つまり、これらの見方を確保するために特に SIR をとる必要はなく、それゆえ SIR を維持するための措置として 2n 提案（の改訂的主張）を受け入れる必要もない。もちろんトロープ唯名論と散在説は、「厳密な同一者としての普遍者」が存在するという見方とは折り合わないが、これらの立場からすれば、この最後の見方はすでにある特定の立場選択を反映したものであり、みな確保を目指すべき中立的な制約などではない。むしろこの見方をとる場合必要になると考えられる 2n 提案の苦境をふまえれば、これは有害なものとして切り捨てるのが合理的な見方とさえ言える。——前段落で示唆された方針に従って 2n 提案を弁護するには、少なくとも以上のような議論を無効化できなくてはならないが、見てのとおりこれはかなり達成の困難な課題である。

## 5. 相対化戦略の改良

ここまでの議論を整理しよう。本稿ではまず、SIR からは明らかな不条理が帰結するという「帰謬法批判」を取り上げた。この批判は、ギルモアの 2n 提案によりいったんは解決されたようにみえたが、今度はこの提案が、普遍者の空間的内在性を単に名ばかりのものにしてしまう（それゆえ SIR の擁護にはならない）という「名目性批判」を受けた。そしてこの批判に対して 2n 提案からなされる応答は、ギルモア自身のものも他のものも、十分とは言いがたいものだった。

ではそうすると結局、SIR は維持できる見込みの薄い立場だということに

なるのだろうか。SIRの支持者にとって幸いなことに、必ずしもそうではない。なぜなら筆者のみるところ、第3節で導入した相対化戦略(2n提案はその一例)には、ギルモアもその批判者たちも検討していない別バージョンの余地があり、そのバージョンの下ではこれまでの批判に満足な応答が与えられるからである。本節では、問題のバージョンを実際に提示してこのことを示そう。

## 5.1 改良案の提示

以下では相対化戦略の改良案を、二つの段階に分けて提示する。その一つ目を始めるに当たってまず注意すべきは、2n提案をめぐるここまでの議論では個物の扱いが明確でなかったという点だ。前節でみた2n提案の二つのバージョンは、空間的関係の項が(普遍者でも位置でもなく)個物であるようなケースをどのように扱うのだろうか。ギルモアやケスキネンらは明示的でないが、この点は次のように考えることができる。まず無制限バージョンの場合、通常n項として扱われる空間的関係は常に2n項関係だとされるから、個物が項となる場合も当然[2n分析]は成り立つ。またもう一方の制限バージョンの場合、[2n分析]は普遍者のみについて成り立つとされるから、個物はその適用範囲から外される。以上のことをふまえると、2n提案の二つのバージョンの主張は次のようなものだったことになる(ここでの「空間的関係」は「通常の仕方では捉えられた空間的関係」の意味)：

- ・無制限バージョン：[2n分析]は、空間的関係の項が普遍者、個物、位置のいずれである場合にも成り立つ。
- ・制限バージョン：[2n分析]は、空間的関係の項の少なくとも一つが普遍者である場合には成り立つが、個物と位置のみである場合は成り立たない。

だがこうして並べてみると、2n提案の可能なバージョンが以上の二つに尽くされないことは明らかである。なかでもここで注目したいのは、次のようなバージョンだ：

- ・準無制限バージョン：[2n分析]は、空間的関係の項の少なくとも一つが普遍者ないし個物である場合には成り立つが、位置のみである場合には成り立たない。

これは要するに、通常 $n$ 項関係として扱われる空間的關係は、大半のケースでは位置への相対化を含む $2n$ 項関係として分析されるべきだが、位置のみが項である場合は(例外的に)見かけどおりの $n$ 項関係だという立場である。

この準無制限バージョンを導く発想は、かなり自然なものだと言える。このバージョンは、空間的な位置そのものと、その位置を占める内容(個物と普遍者)とを区別する<sup>13</sup>。そして、基礎的な意味で空間的關係に立つのは位置であり、他の一切のものはそれぞれ一定の位置を占めるものとして(そのことによって)空間的關係に立つと主張する。このような見方は、普遍者だけでなく個物の空間的關係について考えた場合も、特に違和感を抱かせるものではないだろう。たとえば、「次郎は花子から10m離れている」ということが成り立つ場合、この関係は結局のところ、次郎と花子それぞれが占める位置が互いに10m離れていることによって成り立つ、などのように言うことは決して不自然でないと思われる。

ただし、この準無制限バージョンがすでにそれ自体で本稿の提案したい立場だというわけではない。このバージョンには、前節でみた $2n$ 提案の無制限バージョンと同様の難点があり、それを避けるには改良の第二段階が必要だからだ。直前の準無制限バージョンはあくまで $2n$ 提案の一種である。そのためこの立場は、通常 $n$ 項として扱われる関係の項の中に少なくとも一つ内容的な存在者(普遍者ないし個物)が含まれる場合、その関係を $2n$ 項関係として分析することになる。だがそうすると、問題となる関係が位置と内容的存在者の両方に関わるケースで困難が生じる。なぜならこの立場に従うと、たとえばある個物 $c$ とある位置 $L_1$ が「5m離れている」ということが成り立つ場合、その関係は問題となる位置の自分自身への相対化を含んだもの——「 $c$ は $L_c$ において、 $L_1$ における $L_1$ と5m離れている」という四項関係——として分析されることになるが、このような仕方では位置自身にも相対化が適用されるべきだというのは、まさに無制限バージョンが与していた問題含みの主張だからである。

この難点は、 $2n$ 提案に共通する一つの想定、すなわち、ある空間的關係に対する相対化分析は常に、そのすべての項に相対化を適用する——ゆえに項数を二倍にする——という想定から生じている。だが実際は、相対化戦略の精神はこのように窮屈な仕方では捉える必要はない。むしろ前述の準無制限バージョンによる「位置と内容」の区別をふまえれば、より適切なのは、ある空間的關係の相対化分析はもっぱら位置以外の項に対し相対化を適用するという立場だと思われる。この立場は、これまでみてきた $2n$ 提案と対比すれば、次のような主張として定式化できる：

- ・ **n+k提案**： 通常n項関係として扱われる空間的關係は、その項のうちに含まれる位置以外の存在者（普遍者と個物）がk個である場合（ただし $0 \leq k \leq n$ ）、k個の位置への相対化を含むn+k項関係として分析されるべきである。

つまりある空間的關係の相対化分析は、ちょうどそこに含まれる内容的存在者の数だけ項数を増やすものになるというわけだ。この提案が、上で挙げた難点を避けられることは明らかだろう。そこで問題になった個物と位置の間の關係は、位置の自分自身への相対化を含まないものとして——「cは $L_c$ において、 $L_1$ と5m離れている」という三項關係として——分析されるからである。またもう一つ注意すべき点として、いま導入したn+k提案は、先の準無制限バージョンについて述べた発想の自然さも失っていない。なぜなら二つの立場はともに、「位置とその内容」という自然な区別にもとづき、空間的關係の分析にその区別を反映させることを提案しているからである。

## 5.2 これまでの批判への応答

さらにn+k提案は、これまでみてきた批判からSIRを救う手立てとしても有効である。第一にn+k提案は、最初に提起された「帰謬法批判」に対し、2n提案と同様の仕方で応答できる。第3節でみたように、この批判に対する2n提案の応答は、普遍者に関して[2n分析]が当てはまるという主張にもとづくものだったが、いま導入したn+k提案もこの点に関しては2n提案にまったく同意しているからである。

第二にn+k提案は、前節でみた「名目性批判」に対しても無理なく応じられる。（n+k提案も相対化戦略の一種である以上、この批判に何らかの仕方で応じる必要があることに注意。）この点をより詳しく説明するため、名目性批判の内容を改めて明確にしておこう。この批判は次の二つの前提からなる論証として再構成できる：

- P1：普遍者についてある空間的關係が成り立つことは、それ（ら）が占める位置について対応する直接的な空間的關係が成り立つことから派生した事実である。
- P2：もしP1が真であるならば、普遍者に帰属させられる空間的特徴は単に名目的な（文字どおりでない）ものである。

前節でみた2n提案の二つのバージョンによる応答は、この二つの前提のう

ちP2は疑問視せず、もう一方のP1をどうにかして拒否しようとするものだった。つまりそれらの応答は、名目性批判に応じるためには普遍者の空間性を位置の空間性と同程度に基礎的なものとして確保する必要があると考え、その基礎性を確保するために、擁護することの容易でない主張——制限バージョンの場合は「 $n$ 項関係と $2n$ 項関係の等基礎性」、無制限バージョンの場合は「 $2n$ 分析の全面的妥当性」——を擁護する必要に迫られていた。

これに対し、本稿が支持する $n+k$ 提案は、P1が真であることは単純に認めるため、これらの苦しい主張を行う必要がない。代わりに $n+k$ 提案は、もう一方のP2を拒否することで名目性批判に応じようとする。すなわち、普遍者を項とする空間的關係が「位置を項とする空間的關係に対して派生的」だとしても、そのことは、前者が「単に名目的」であることを意味するわけではない、と主張するわけである。

P2を拒否するというこの道は、ギルモアやケスキネンらは考察していないが、ひとたびそのつもりでみてみれば決して無理筋ではないことがわかる。特に $n+k$ 提案における個物と普遍者の扱いの下では、P2の拒否は十分理にかなったものになる。前述のように、文字どおり空間内に存在するものの典型である個物も、位置と比べれば派生的な仕方では空間的關係に立つ、と考えることは自然である。つまり個物も、一定の位置を占めるものとしてはじめて諸々の空間的關係に立つ、と。そして $n+k$ 提案は、この点に関して普遍者を個物と同等なものとして扱っている。つまりこの提案の下では、普遍者について成り立つ空間的關係は、たしかに位置同士の間で成り立つそれと比べれば派生的だが、その派生性は個物の場合と同程度のものにすぎない<sup>14</sup>。したがって、個物の空間性が単に名目的なものでない——これには同意してもらえらるだろう——限りにおいて、普遍者の空間性も単に名目的なものではないと主張できることになる。

このように、 $n+k$ 提案はP2を拒否するためのよい理由をもち、それゆえ名目性批判に無理のない仕方では応じることができる。この観点から振り返ってみれば、前節で考察した $2n$ 提案の二つのバージョンは、P2を拒否することはできないという一種の思い込みに囚われた状態で名目性批判に応えようとすることで自ら苦境を招いていたことになる<sup>15</sup>。特に前節でみた分析(\*)に戻って言えば、この「思い込み」は、普遍者の空間的關係が(\*)のような形で正しく分析されること——これは前提P1に当たる主張で $n+k$ 提案も認める——をひとたび認めるなら、普遍者の空間性が単に名目的であることも認めざるをえない、という見方に当たる。たしかに(\*)は、普遍者を抽象的存在者として(ゆえにその空間性をせいぜい名目的なものとして)捉える

立場でも受け入れられる分析だが、直前でみたようにこれは、普遍者の空間性を（少なくとも個物のそれと同程度には）文字どおりのものとして捉える  $n+k$  提案のような立場でも受け入れられる分析である。つまり (\*) は本来、普遍者の空間性が名目的かどうかに関して中立的な分析であり、P2に相当する追加的な前提— $n+k$ 提案によればとる必要のない前提——をとらない限り、そもそもSIRにとって害となる（普遍者の空間性を名目的にしてしまいSIRを抽象的普遍者説と区別のつかないものにする）ようなものではなかったわけである。

まとめると、SIRは相対化戦略の一種である $n+k$ 提案を採用することで、従来の帰謬法批判およびそれに付随する名目性批判に満足な応答を与えることができる。

## 6. 疑問と応答

しかしこの主張に対しては、いくつかの疑問が予想される。以下では二つを取り上げ応答しよう。

**疑問1**： $n+k$ 提案によると、普遍者に関する空間的事実は、位置に関するそれと比べれば派生的だが、個物に関する空間的事実と比べてより派生的なものではない。この主張は、直前でみた名目性批判への応答（前提P2の否定）の根拠になっていたから、 $n+k$ 提案にとって本質的である。しかしこの主張は疑わしいのではないか。というのも、一方の個物は直接的に位置を占めその空間的特徴を引き継ぐのに対し、他方の普遍者はもう一段間接的に、つまり、自身を例化する個物を介してはじめて位置と関係すると考えられるからである。実際、およそ普遍者が占めると言われる位置は、その個別例が占める位置に限られる。つまり普遍者は、何らかの個物に例化されることではじめて何らかの空間位置を割り当てられるのであり、普遍者の空間的特徴はあくまで個物のそれからさらに派生したもの——いわば個物が位置から借りる空間的特徴を「また借り」したもの——として捉えられるべきである。

**応答**：議論の便宜のため、「普遍者に帰属させられる空間的特徴は個物の空間的特徴からさらに派生したものである」といういま述べられた主張をDと呼ぼう。上の疑問に答えるには、SIRの支持者がこの主張Dを正当に拒否できることを示せばよい。そしてそれは実際に可能である。第一に、SIRの支持者がとりうる立場の中には、いわゆる「普遍者の束説」もある（Hawthorne & Cover 1998; Lafrance 2015; Paul 2006）。この立場によれば、通常「個物」



と呼ばれているものは実際には共に例化された普遍者の束に他ならず、それゆえ空間的特徴の派生性に関して言えば、(Dが述べるのとは逆に)むしろ個物の空間的特徴の方こそが普遍者のそれから派生したものである(Ehring 2002: 23). 第二に、たとえ普遍者の束説をとらないとしても、SIRの支持者は、個物と普遍者のある種の対等性を主張することができる。たしかに、普遍者が占める位置はその個別例が占める位置に限られるという前述の見方はもっともらしい(これはいわゆるfree floatingな普遍者の拒否だ)。しかしそれを言うなら、個物の方も同様の依存性をもつと主張することも十分可能だ。すなわちSIRの支持者は、一般に個物は何らかの普遍者と結びつくことなしには存在できず、それゆえ何らかの普遍者が占める位置にしか存在できないという立場をとることもできる(これはいわゆる「裸の個別者」の拒否だ。Cf. Armstrong 1978: 113, 1988: 107f, 1989: 94; Meinertsen 2018)。この立場をとる場合、普遍者の空間的特徴は、個物の空間的特徴と(一方的な基礎づけでなく)相互依存的な関係に立つことになるから、Dはやはり拒否される。このように、SIRの支持者にはDをしりぞけるための複数の選択肢があり、それらのいずれかと組み合わせることで $n+k$ 提案を問題なく保持できる。

**疑問 2** : 二つ目の疑問は、時空の存在性格に関する次のようなものだ(cf. Magalhães 2006: 302ff; Hawthorne & Cover 1998: 212f)。 $n+k$ 提案においては、空間位置はそれを占める内容(個物と普遍者)から区別され、ある種特権的な身分を与えられている。すなわち、後者があくまで位置を介して空間的關係に立つのに対し、位置は他の何ものにも拠らず、それ自身の権利で空間的關係に立つことができる。だがこのような見方は、時空についての疑わしい「実体説」の立場にコミットするものではないだろうか。というのも、上の仕方理解された位置は、他の一切のものに先立って存在可能な「実体」でなければならず、しかもそれらの実体は、質的にまったく違いがない以上、ある種のプリミティブな同一性をもつことで互いに異ならなければならないはずだからだ。こうした実体から構成されたものとして時空を捉える見方は、時空を事物同士の諸関係から派生したものとみる「関係説」と真っ向から対立する。つまり $n+k$ 提案は、不当にも時空の關係説を排除し、問題のある実体説に与している点で疑わしいと思われる。

**応答** : ここで詳細に立ち入る余裕はないが、この疑問にはさしあたり二つの仕方応答できる。第一に、「実体説と関係説」という大きな括りでみた場合、そもそも前者が後者よりも不利な立場なのかどうかは決して明らかではない。むしろ現代物理学の基本的な時空理論である一般相対性理論に鑑み

れば、優位に立つのは実体説の方だと考える論者もいる (e.g. Campbell 1990; Hofer 1996; Nerlich 2003)。実際、一般相対性理論によれば、時空は計量(メトリック)という一種の変数によって決まる幾何学的・位相的な構造をもつが、こうした構造は世界からすべての物体を取り除いても消え去るものではない (Huggett et al. 2022: § 2.4)<sup>16</sup>。つまり、いかなる物体もその中に存在しない時空は物理的に可能である (藤田 2016: 128f)。また時空の構造を決める計量は、世界の物理的内容を表す別の変数(エネルギー運動量テンソル)と相互に依存したものとして関係づけられるが、このことの一つの素直な解釈は、一般相対性理論において時空は、単に物体や出来事にとっての不動で不活性な背景のようなものではなく、それらと相互に作用することのできる「動的対象」だというものである (Nerlich 2003: 288. Cf. Hofer 1996: 26; Dorato 2000: 1616f)。もちろん関係説の支持者は、時空の実体的性格を示唆するこうした語り方を道具主義的に解釈する(物理的内容のみについての言明へと還元する)ことを試みるわけだが、そうした試みの存在自体が物語るように、実体説が現代科学の観点からみて一方的に不利な立場であるとは言えない。

とはいえ、関係説が今なお生きてきた選択肢である以上、それを単純に排除するのはやはり形而上学理論として好ましくないという論点は残るだろう (Magalhães 2006: 302ff)。これについては応答の二点目として、 $n+k$ 提案が「関係説を排除する」という主張も無条件に正しいわけではないということを目指したい。この提案が必要とする実体説は比較的穏当なものであり、それはある種の関係説とは両立可能だと考えられるからである。 $n+k$ 提案にとって肝要なのは、さまざまな物理的内容によって占められ、直接的に時空の関係に立つことができるものとしての位置が存在することであり、それ以上ではない。そしてこのことは、ときに実体説(ないし伝統的な絶対説)に結びつけられる強い主張、すなわち、時空の性質はその内容の分布状態などから完全に独立だとか、時空点がプリミティブな同一性をもつとかいった主張にコミットせずとも認めることができる<sup>17</sup>。実際、これらの主張にコミットしない実体説としては、時空を計量場(重力場)と同一視する「計量実体説」という立場も提案されており (Hofer 1996)、これはある種の関係説と本質的に等しい時空論として解釈されている (藤田 2016: 134f; Hofer 1996: 25)。

## おわりに

本稿では、普遍者の多重位置の問題が強い内属的実在論 (SIR) にとって

どの程度の脅威になるかを検討した。そして、この問題は空間的關係についての適切な形の相対化分析を採用することで十分に解決可能だと論じた。もっとも本稿では、いわゆる關係的普遍者の位置をどう考えるべきかという問題には立ち入らなかった。この問題はSIRに固有の考察を要求すると思われる (Lewis 1986: 67f; MacBride 1998: 208)、関連する議論は実際すでにいくらか行われているが (e.g., Armstrong 1988: 110f; Meinertsen 2018: ch.8)、この問題について考えるのはまた別の機会にしよう<sup>18</sup>。

## 注

1. ただし実のところ、筆者自身は實在論に対して一般に懐疑的である。本稿の議論は、最終的に實在論をとるにせよとらないにせよ、そのためのよい理由を求めたいという動機から行われている。
2. この意味での内属的實在論は「アリストテレス的」實在論とも呼ばれ、例化の原理を認めない「プラトンの(超越的)實在論」と対比される。ただし近年、両者の折衷的立場も提案されている (Peacock 2016)。
3. ただしこの点に関する批判的考察として前田 2007も参照。なお、具体者説の利点としては以上の三つの他にも、例化関係や事態の概念を削減できることが挙げられることがある (Hawthorne & Cover 1998; Lafrance 2015: 204f. 批判的考察として Effingham 2015: 852f)。
4. 具体者説の中には他に、普遍者がもつ位置は単一領域だが、普遍者は各位置で異なる部分をもつわけではないという立場——多重位置説でも散在説でもない extended simple としての普遍者説——もあるが (Effingham 2015)、以下でみる SIR への批判はこの立場にも当てはまるので本稿では立ち入らない。
5. こうした批判以前に、多重位置の想定はそもそも理解可能でさえないという反応もありうる (cf. Heil 2012: 280f; Edwards 2014: 35)。だがこれに対しては、「あるものが同一の全体のまま異なる位置を占める」という想定自体は持続や様相に関する議論でもみられる一般的なものであり (Simons 2004: 345ff; Gilmore 2018: § 6.3)、特に理解を拒むものでないと応じうるだろう。
6. この批判に対しては、耐続者のタイムトラベルが可能だとすれば、ある時点で同一の存在者が相反する特徴をもつことは一般に不可能ではないという応答があるかもしれない。しかしその場合も SIR の批判者は、「どんな存在者も、タイムトラベルの(ようにある時点で因果的に結びつく複数の現れをもつ) ケース以外では、相反する特徴を同時にもつことはできない」というより弱い主張に訴えることができ、上の批判にはこちらの弱い主張で十分だから、この応答の有効性は低いだろう (cf. Gilmore 2003: 427; Ehling 2011: 29)。
7. Gilmore 2018: § 6.6 では、この相対化戦略以外にも二つの応答方針が紹介されている。またエーリングとロウによる批判をそれぞれ個別に検討するものとし

- て、Peacock 2016とMahlan 2018も参照.
8. まず $L_1$ を北極点とした場合、Vは同じく北極点にあるWより北にはない。また $L_1$ を南極点とした場合も、Vは北極点と南極点のどちらのWより北にない。(総和の場合は明らかなので省略.)
  9. 「 $R^*(V, L_a, a, L_a)$ 」の意図された読み方は、「Uは $L_a$ において、 $L_a$ におけるaとまったく同じ位置にある」である。
  10. エーリング自身の議論の文脈をふまえるとやや疑問の余地もあるが、少なくともKeskinen et al. 2015: 58とMahlan 2018: 40 n.3はエーリングをこう解釈している。
  11. 以下の応答に近いものはケスキネンらも取り上げ却下しているが(Keskinen et al. 2015: 64f), その却下の仕方は少々理不尽に見える。彼らは、SIRが目下不整合の疑惑をかけられていることを理由に、本註を付けた段落の最後で述べる方法論の原則に2n提案が訴えることはそもそもできないとしている。だがこの方法論の原則は、まさにそうした疑惑からある立場を救うために訴えてよい(もちろんその立場が十分な動機をもつという条件で)はずのものだと思われる。
  12. またそれ以前に、ここでもち出される諸々の見方が、実際に確保すべき desiderata (しかも目下の弁証法的役割を担えるだけの重みをもったそれ)であることを示す必要もある。だが時空主義一つとっても強力な反対者はおり(e.g. Lowe 2006: 178ff), これも容易な作業ではないだろう。
  13. ただしこの区別は、両者の完全な独立性を意味するものではない。以下の第6節の疑問2を参照。
  14. 同様のポイントは、若干異なる文脈においてだがMagalhães 2006: 307でも論じられている。
  15. ギルモアがP2に当たる前提を認める箇所では(Gilmore 2003: 420, 425), エーリングの関連する議論(Ehring 2002: 18)が念頭におかれていると思われるが、ギルモアは、普遍者の空間性が「位置のそれに対して派生的」であることと「個物のそれに対して派生的」であることを充分区別していないように見える。おそらくこの区別の不在が、P2が拒否しがたく映る要因である。なぜなら(第6節の疑問1の箇所でもみるように)、普遍者の空間性が上の二番目の意味で(i.e. 個物に対し)派生的であることは、それが「単に名目的」であることをたしかに強く示唆するが、「派生的」の意味が区別されない場合、一番目の意味で(i.e. 位置に対し)派生的であることから「単に名目的」へ移行ができてしまうからである。
  16. この場合、時空は平坦な計量をもつミンコフスキー時空になる。言い換えれば、「物体が全く存在しない時空はミンコフスキー時空になるという前提で、相対論は構築されたもの」(藤田 2016: 128)である。
  17. 一方で $n+k$ 提案は、「物体間の時空的関係は直接的である(位置に媒介されたものではない)」というある種の関係説の主張(Nerlich 2003: 283の $R_2$ )とは両立しない。だがこの主張にはSIRとは独立の論拠からの反論がある(ibid.)

18. 本稿の作成過程では二名の匿名査読者から有益なコメントをいただいた。記して感謝する。また本稿は、文科省科研費の助成を受けた研究(課題番号21K00026)の成果の一部である。

## 参考文献

- Armstrong, D.M. (1978). *Nominalism and Realism. Universals and Scientific Realism Vol. I*. Cambridge UP.
- (1988). Can a Naturalist Believe in Universals? In E. Ullmann-Margalit (ed.) *Science in Reflection*. Springer: 103-15.
- (1989). *Universals: An Opinionated Introduction*. Westview Press.
- (1997). *A World of States of Affairs*. Cambridge UP.
- Campbell, K. (1981). The Metaphysics of Abstract Particulars. *Midwest Studies in Philosophy* 6: 477-88.
- (1990). *Abstract Particulars*. Basil Blackwell.
- Dorato, M. (2000). Substantivalism, Relationism, and Structural Spacetime Realism. *Foundations of Physics* 30(10): 1605-28.
- Edwards, D. (2014). *Properties*. Polity.
- Effingham, N. (2015). The Location of Properties. *Noûs* 49: 846-66.
- Ehring, D. (2002). Spatial Relations Between Universals. *Australasian Journal of Philosophy* 80: 17-23.
- Ehring, D. (2011). *Tropes: Properties, Objects, and Mental Causation*. Oxford UP.
- Forrest, P. (2017). Acquaintance with Universals. *Metaphysica* 18: 1-13.
- 藤田 翔. (2016). 一般相対性理論における時空論の実体説と関係説、そして構造実在論への展開。『年報人間科学』37: 123-41.
- Gilmore, C. (2003). In Defense of Spatially Related Universals. *Australasian Journal of Philosophy* 81: 420-8.
- Gilmore, C. (2018). Location and Mereology. *The Stanford Encyclopedia of Philosophy (Fall 2018 Edition)*. E. N. Zalta (ed.). URL=<<https://plato.stanford.edu/archives/fall2018/entries/location-mereology/>>.
- Grossman, R. (1983). *The Categorical Structure of the World*. Indiana UP.
- (O'Leary-)Hawthorne, J., Cover, J. (1998). A World of Universals. *Philosophical Studies* 91: 205-19.
- Heil, J. (2012). *The Universe As We Find It*. Oxford UP.
- Hofer, C. (1996). The Metaphysics of Space-Time Substantivalism. *Journal of Philosophy* 93: 5-27.
- Huggett, N., Hofer, C., Read, J. (2022). Absolute and Relational Space and Motion: Post-Newtonian Theories. *The Stanford Encyclopedia of Philosophy (Spring 2022 Edition)*. E. N. Zalta (ed.). URL=<<https://plato.stanford.edu/archives/>>

spr2022/entries/spacetime-theories/>.

- Keskinen, A., Keinänen, M., Hakkarainen, J. (2015). Concrete Universals and Spatial Relations. *European Journal of Analytic Philosophy* 11: 57-71.
- Lafrance, J. (2015). A Bundle of Universals Theory of Material Objects. *Philosophical Quarterly* 65 (259): 202-19.
- Lewis, D. (1986). *A Plurality of Worlds*. Blackwell.
- Lowe, E.J. (1998). *The Possibility of Metaphysics*. Oxford UP.
- Lowe, E.J. (2006). *The Four-Category Ontology*. Oxford UP.
- MacBride, F. (1998). Where are Particulars and Universals? *Dialectica* 52: 203-27.
- 前田高広. (2007). 知覚経験の対象としての性質. 『科学哲学』 40-2 : 41-56.
- Magalhães, E. (2006). Armstrong on the Spatio-temporality of Universals. *Australasian Journal of Philosophy* 84: 301-8.
- Mahlan, J. (2018). Can Universals be Wholly Located where Their Instances are Located? *Metaphysica* 19: 39-55.
- Meinertsen, B. (2018). *Metaphysics of States of Affairs*. Springer.
- Moreland, J.P. (2001). *Universals*. McGill-Queen's UP.
- Nerlich, G. (2003). Space-Time Substantivalism. In M. Loux and D. Zimmerman (eds.) *The Oxford Handbook of Metaphysics*. Oxford UP: 281-314.
- Paul, L.A. (2006). Coincidence as Overlap. *Noûs* 40: 623-59.
- Peacock, H. (2016). Where Are Universals? *Metaphysica* 17: 43-67.
- Quinton, A. (1958). Properties and Classes. *Proceedings of the Aristotelian Society* 58: 33-58.
- Simons, P. (2004). Location. *Dialectica* 58: 341-7.

(千葉大学)